

完全保存版・長渕 剛を突き動かした“怒り”“苦しみ”、そして“希望”

2011年10月10日発行発売 (毎月10日発行発売)
ローリングストーン日本版

Rolling Stone

11

NOVEMBER 2011
vol. 55

¥580

特集

LEADERS WHO ROCK

横尾忠則、若松孝二、
Chim ↑ Pom……
時代を創る
先駆者たちの金言

ストーンズはようになる?
ミック・ジャガー
レゲエで再デビュー!?

“静かなるビートル”
ジョージ・ハリスン
知られざる私生活

オバマ大統領
果たすべき「10の約束」

黒夢“13年目の真実”

“縛られないロックンロール”
土屋アンナのポジティブ論

元オアシス
ノエル・ギャラガー復活宣言

THE BAWDIES「スーツの美学」

長渕 剛

3.11からの
“闘い”
全記録

独占
1万字
インタビュー



この時代の表現者が 何を創ったか

岡本太郎の作品「明日への神話」に福島原発の絵を描き加えて
物議を醸した若きアーティスト集団、Chim↑Pom。
展示会の初日、彼らの思考を探りに会場へと赴いた。

Text by Keiichi Kanda Photograph by Kaori Nishida



取材当日

Chim↑Pom

は個展のオープニングレセプションを数時間後に控え、最後の追い込みをかけているところだった。工事現場さながらの展示会場で、作業着を着たメンバーやスタッフたちが慌ただしく動き回っている。話題となった「REAL TIMES」から約5カ月、今回の新作はどんなものなのか？ 会場に入るとリーダーの卯城、エリイ、林がやって来て、そのままインタヴューに突入した。

「まずは、今回の展覧会について教えてもらえますか？」

卯城「展覧会を9月にやることはすっごく前に決まっていたんですけど、原発事故の前から」

エリイ「そう。9月に入ったら同時多発的にいろんな場所で行こうと思っていて、テーマも考えていたんだけど、震災が起こって急速5月に、震災をテーマにした「REAL TIMES」をやりたいなって」

卯城「そこで出し切っちゃった部分もあったんですけど、やっぱり改めてテーマを詰め直しました」

「そして、展示会のタイトルが『SURVIVAL DANCE』。どんなイメージでつけたんですか？」

卯城「サバイバルって言葉は、60年代に、核の脅威や環境破壊、エネルギーが枯渇することへの恐怖から終末思想が広がって出てきたんです

が例えば、その時注目された核シェルターってというのは自分本位で、自分だけ生き残ろうっていう考えでした。だけど、「それじゃダメじゃないか」という意見が出てきて、

みんな生きて並びようってムードに

Chim ↑ Pom

チム↑ポム ● 2005年、エリイ、卯城竜太、林靖高、水野俊紀、岡田将孝、稲岡求で結成したアーティスト集団。代表作に「ヒロシマの空をピカッとさせる」など。震災後、岡本太郎「明日の神話」に原発の絵を加えた。Chim↑Pom展「SURVIVAL DANCE」を10月15日(土)まで、無人島プロダクションにて開催。http://chimpom.jp



Photo: Yoshihisa Umekawa
©2008 Chim ↑ Pom
Courtesy of Mujin-to Production, Tokyo

【SUPER RAT】

「スーパーラット」と呼ばれる渋谷センター街に生息する野良ネズミを何匹か捕獲して、ピカチュウそっくりの剥製にしたジオラマ作品。



©2008 Chim ↑ Pom
Courtesy of Mujin-to Production, Tokyo

【BLACK OF DEATH
(above the Diet Building,
Nagatacho, Tokyo)】

国会議事堂の上空にカラスの集団を誘導して空を埋め尽くし撮影した作品。



©2011 Chim ↑ Pom
Courtesy of Mujin-to Production, Tokyo

【REAL TIMES】

東日本大震災後、何度も福島第一原子力発電所や被災地に足を運んで、ボランティアなどをしながら撮影した映像作品。テーマは「3.11以降」。

なった。それが、宇宙船地球号、というキーワードとか、ヒッピーの流れにつながるっていった経緯があるんですよ。当時は多少SF的発想だったと思うんですが、今の状況ってもうSFじゃない。マジでサバイバルしながら生きていかなきゃ、だと思っただけ。みんな安全な場所に引越して、ついでにイメージじゃない。例えば、僕たちのデビュー作品『SUPER RAT』は、駆除のために毒の餌を撒いても、その毒に対抗する抗体ができて、農を仕掛けても上手く避け、運動能力も上がって爆発的に増えたネズミの通称。彼らみたいになんか逆境だろうが、状況になろうが、自分の地元とか、現状に対して自分が進化しながら生きていかなきゃ、だと思っただけ。現実の世界を悲観するだけじゃなく、ポジティブに動かないと生きていけない、という思いを込めて。サバイバル・ダンス、なんです」

林「ほかの場所に行ける人は行けばいいけど、僕は東京でサバイバルしていかなくちゃいけないっていう」
エリイ「うん。うちらには、ここでサバイバルしていかうっていう意思があるからね」
卯城「放射能の問題だけじゃなく、岡本太郎の絵のことで、書類送検された時に痛感したのが、僕たちはこの管理社会のなかでサバイバルして活動してること。新作の『Invisible Wall』は、その経験があって生まれた作品です。僕らが足しげく通った渋谷警察署の前に、メンバーの稲岡が立って、背景に馴染むボディペイントを施して、透明人間に成りきった。グラフィティって、リー

ガルカイリー・ガルかつて線引きが態度としては大事なんです。この作品では、今みたいなサバイバルが必要な状況下で、世に逆らってリーガルなことをやり続けるよりも、僕たちにとってはザ・リーガルな存在の渋谷警察署の壁になる。ことから発想しました。その壁に、カッターで傷を入れて流した血で落書きして、僕たちの思う、最高のリーガル・グラフィティを作ったんです」
林「壁に展示されている絵について教えてください」
エリイ「66年前に原爆が落とされた時の残り火を、保存していた人がいるんだけど、その、原爆の火、を美術館から分けてもらって描いたの。ドン・キホーテで、コアラのマーチとか、みんなが馴染みのあるたくさんの大衆的なデザインをピックアップして、それらを森羅万象として、原爆の火に絵にした」
林「あの作品？(壁を指さして)」
エリイ「それは、カンボジアまで行って、カンボジア軍の射撃場で制作した『Ellie vs Hollywood』。今、あのスクリーンにも穴が開いているじゃない？ あれエリイが撃ったんだけど、その射撃場で、ハリウッド映画の銃撃シーンの、こっちに向けて撃つところをプロジェクターで投影し、それに対して、エリイが本物の銃で撃ち返したの。テーマは、セレブのゲーセン。じゃあ、あっちの作品は林が説明します！」
林「それは、福島の閉鎖された公園で防護服を着た子供が遊んでるところをイメージし、現地で立体化したサンドアート。セシウムとかが入っている可能性のある砂で作りました」

た」
林「『REAL TIMES』では、避難指示が出ている20キロ圏内に入られたんですよね？」
卯城「はい。あの作品の時はね、5キロくらいまで」
エリイ「いや、もっとだよ」
卯城「まあ、現場までは行ってます」
林「新作にも、痛烈な批判精神や皮肉を感じます。なぜ、メッセージ性の強い作品を創り続けるのですか？」
卯城「後世にまで残る放射能の脅威を撒き散らしたこの時代を生きた表現者が、いったい何をしたのかって、創ったのかって、のちのち問われ、検証される日が来る。その時に、「はい、誰もいませんでした」ってなるのは違うと思うから」
林「なるほど。さて、日本のアートの話について聞かせてください。08年には、展示会「日本のアートは10年おくられている」を開催していましたが……」
卯城「業界がミスってきたなと思うのが、芸術が何かをわかる人だけのために作品を創れば、いいっていう。壁の中で、芸術をやり続けてきたところ。一般の人がついていけない感じが、ほかの国に比べて相当強い気がする。明治維新の時に、福沢諭吉の「学問のすゝめ」がメチャクチャ売れたんだって。当時は、明らかに学問をすすめるべきじゃないって、それは、学がある人となんかの差が、すごく大きかったという状況があったからなんだけど。なんか、今のアートはその状況に似ていると思う。それでいいなんて、もったいなさすぎる！」
林「それをChim ↑ Pomのみなさん